

巻頭言

節目の年に過去を振り返る ―実用性と触発性―

聖隷クリストファー大学 宮前 珠子

平成 31 (2019) 年、国では平成天皇の退位、作業療法界では指定規則が昨年 10 月に改訂されて今年度から本格的に施行されることになり、本会では昨年 12 月半ばに日本学術会議の協力学術研究団体への指定が決まり、そして会長が昨年 10 月宮前から佐藤善久氏に交代という節目の年を感じ、過去を紐解いてみた。

本会は初代会長であった矢谷令子先生が平成 6 年から準備を始め、平成 8 (1996) 年 6 月 4 日に 38 名の有志によって、「作業療法の教育の質の向上、教授法の研究、教育に携わるもの同士が切磋琢磨する教育と研究交流 (設立趣意書より)」を目的に発足した。第一回研究大会はその年の 11 月に東京で開催され、その後現在まで毎年継続して開催されているが、本会機関誌「作業療法教育研究」1 巻 1 号が発刊したのは 5 年目の平成 12 (2000) 年 11 月であり、矢谷会長の巻頭言、本会の設立趣意書、第 1, 2 回研究大会抄録が掲載されている。編集委員長は 2 巻 1 号まで山田孝先生であり、折り目正しい端正な編集ぶりが伺われる。(なお、機関誌は全て本会 website で見ることができる)。その後機関誌の研究大会記録は、タイトルのみで抄録のない時期や構成に一貫性のない時期などはあるが、一応現在までの研究大会の講演や会員発表についてはおおよそ知ることが出来るので、この 20 年間の推移を機関誌の記録と私の記憶を頼りに振り返ってみた。

本会設立初期の熱気にあふれていた時期は、急速に養成校が増加しそれに伴う新任教員が増えた時期であり、乞われるままに教員になり経験も知識も不足していると感じていた若手教員が悩みを語り、共有し、解決の糸口を見出そうとしていた時代であった。次の時期は、医学教育界の新しい教育法導入の影響を受け、PBL, OSCE, SP, ポートフォリオなど、学習者のアクティブラーニングの方法に関心が集まり、講演、ワークショップ、実践例の発表が行われた。この頃まではおよそ 40 名前後の参加者があったが、その後学術集会のテーマによっては 100 名近い参加者の時、20 名に満たない参加者という数年を経て、ここ 4 年ほどは 50 名から 100 名の参加者を得るようになった。国試ガイドライン改訂や、指定規則改定など養成校運営上必須の情報が提供されるテーマ、またクリニカルクラークシップなど臨床実習の問題解決の糸口を見いだせそうなテーマでは参加者が多くなる傾向が感じられる。

学会や研究会に参加する目的・魅力は、広く世界、国、職能団体の動向を知り、自分の立ち位置を確認するという「実用的」な目的と、それまで見たことも聞いたこともないような、新しい見方、新しい方法、新しい考え方、優れた実践などに触れ、インスピレーションを得て、自らの次の一步の糧にするという「触発的」目的があるように思われる。

OT 学会は、この両者の情報に満ちた坩堝であり、私が所属する他の会で言えば、作業科学セミナーは、実用的ではないが目をそばだたせるようなインスピレーションを得る「触発的」場所、日本作業行動学会は、複雑で曖昧な人間の作業行動を、MOHO を使って厳密に分析することを通して OT の効果のエビデンスを示し一般化を目指すアカデミズムにあふれた「実用的ではあるが触発的」な学会である。

では、OT 教育研究会は何であろうか? ここ数年の方向性からは、変化しつつある OT 養成教育制度の情報提供という実用的目的の一つの柱とし、もう一方で教育にインスピレーションを与え、イノベーションをもたらす原動力となるようなテーマを設定しているところが特徴であり、それが参加者増とリンクしているように思われる。

「実用性」と「触発性」の両者を兼ね備えることが魅力ある研究会・学会の鍵のように感じられる。